

日本には四つの季節があります。四つの季節に従って自然の景色も変化を見せます

高等学校教材

日语泛读

第四册

目次

文法と語

動詞の活用——名詞の活用

のちのち——未来の語

自然の風景と季節

自然（自然の語）

四季の風景

自然の風景と季節

文法と語

動詞の活用——名詞の活用

のちのち——未来の語

自然の風景と季節

自然（自然の語）

四季の風景

自然の風景と季節

自然（自然の語）

四季の風景

自然の風景と季節

自然（自然の語）

文法と語

動詞の活用——名詞の活用

のちのち——未来の語

自然の風景と季節

自然（自然の語）

四季の風景

自然の風景と季節

自然（自然の語）

外语教学与研究出版社

高等学校教材

日 语 泛 读

第四册

主 编 王秀文

副主编 李庆祥

外语教学与研究出版社

(京)新登字 155 号

图书在版编目(CIP)数据

日语泛读 第四册/王秀文主编. - 北京:外语教学与研究出版社, 2001

ISBN 7-5600-2236-7

I.日… II.王… III.日语-高等学校-教材 IV.H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2001)第 033687 号

日语泛读 第四册

主编:王秀文

* * *

责任编辑:刘永志

出版发行:外语教学与研究出版社

社 址:北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com.cn>

印 刷:北京大学印刷厂

开 本:850×1168 1/32

印 张:8.125

字 数:146 千字

版 次:2001 年 9 月第 1 版 2001 年 9 月第 1 次印刷

印 数:1—8000 册

书 号:ISBN 7-5600-2236-7/G·1018

定 价:9.90 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话:(010)68917519

修订版说明

本套教材(原书名为《现代日语阅读教程》,共四册,高等教育出版社)自1994年9月陆续出版以来,为国内许多大学日语专业选用,对促进日语教学起到了积极作用。由于出版量有限,近几年出现了供不应求的现象。为满足教学需要,决定修订再版。

另外,经过多年的使用,有些文章内容已显陈旧,同时在使用过程中也发现了一些问题需要修正。在此次修订再版之际,我们在保持原教材体系不变的情况下,更换了近三分之一的内容,使文章更加增强了时代感和可读性。同时,对一些印刷错误及练习中的不当之处做了最大限度的纠正。

尽管如此,肯定还会存在一些不尽人意之处,敬请广大师生继续不吝赐教,以便不断修改、完善。

此次修订再版得到了外语教学与研究出版社日语部的支持和协助,在此表示衷心的感谢。

直接参加本册修订工作的有:大连民族学院教授王秀文、讲师刘俊民以及在该院任教的两位日本籍教师。

编者

2000年岁末

原版编写说明

《现代日语阅读教程》是为适应我国日语教育的发展和日语教学的需要而编写的辅助性教材，主旨在于通过有指导的大量阅读，来提高学生阅读理解和外语思维、分析的能力，以达到巩固所学的语言知识；扩大知识面和词汇量；丰富日语语感；运用日语进行交际等目的。本教程适用于日语专业的泛读课、大学日语的阅读课和各类日语教学单位的教学，也可供广大自学日语的人员使用。

本套教程分为四册，每册 25 课，可供教学单位选择使用。每课由课文、“ことばの説明”、“練習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ”等部分构成。课文选入的文章，力求避免与国内其它教材中已出现的文章相重。文章篇幅以 3,000 字左右为起点，渐次增至 6,000 字左右，在编排上采用了循序渐进、由浅入深的原则。选材时充分注意了文章的思想性、实用性、知识性、科学性和趣味性，同时也兼顾了文章题材的广泛性和体裁的多样性。为扩大学生的视野和知识面，还有意选用了个别从语法和句子结构的角度来看不是很规范的文章。

“ことばの説明”部分，从课文中提出了会影响阅读或理解的词语约 2% 左右，并标注日语读音或汉字。与前三册不同，本册生词采用日语注释。有少量在意思上一目了然，但发音却有些难度的汉语词汇和一般性人名、地名等，在课文中标注着“振り仮名”。《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》中规定的词汇，原则上不在此列出。

练习的编写，以努力提高学生的理解能力和突出练习在教学中的指导性作用为原则。“練習Ⅰ”以词语练习为主，从课文中

提出与文章理解密切相关的词语（包括语法现象）5个左右作为问题，而且每个问题后都设有答案若干，以选择的方式进行语义及用法方面的练习。“練習Ⅱ”以内容练习为主，从课文中提出与文章内容的理解密切相关的问题（包括语法和句法现象）5个左右，并结合文章内容在每个问题后设有答案若干，供选择练习。“練習Ⅲ”以结合文章的主题思想和中心内容为前提而提出2个左右问题（本项练习从第一册第15课开始设），以供学生从语篇的角度进行思考、分析和概括。“練習Ⅳ”为快速阅读部分，每课都选择一篇题材和内容与正文相近的短文为语言材料，并从中提出3个左右语言理解方面的问题或分析归纳方面的问题，以选择的方式供理解练习。短文选用标准与课文部分相同。这一部分为教学上的补充内容，在时间要求和教学方法上可灵活处理。

《现代日语阅读教程》（1~4册），由王秀文（辽宁师范大学）任主编，李庆祥（山东大学）任副主编。第四册由王秀文、村田裕子（日本北海道大学语言文化部）编写。刘耀武先生（中国日语教学研究会会长、黑龙江大学外语学院副院长、教授）审定了全文。

由于我们经验不足，水平有限，加之时间仓促，错误及不当之处在所难免，欢迎日语界同仁及同学们批评指正。

最后，本教程的编写和出版得到高等教育出版社外语编辑室原主任尹学义先生的大力支持和帮助，特表谢忱。

编者

1995年元旦

目 録

第一課	野バラ	1
第二課	名刺と飯	10
第三課	団塊世代——老後の闘い	19
第四課	のろわしい原子爆弾	30
第五課	日本の戦後体制	40
第六課	QOL (生命の質)	50
第七課	シャクシ・女・魂	60
第八課	大人たちの「不愉快病」	69
第九課	苦い夏	79
第十課	こじれる学校「事件」	89
第十一課	セメント樽の中の手紙	99
第十二課	過労死の原因と背景	109
第十三課	近代文学の誕生	120
第十四課	不幸な予言者	131
第十五課	コカ・コーラと可口可樂	141
第十六課	あいまいな日本と私	151
第十七課	消費文化の誕生	161
第十八課	社員も知らない松下電気	171
第十九課	木の根	182
第二十課	外国人も「住民」	192
第二十一課	21世紀への新しい道	202
第二十二課	深刻化する酸性雨	212
第二十三課	映画と小説	222
第二十四課	和語・漢語・外来語をめぐって	231
第二十五課	新・日本型経営の確立	241

第一課 野バラ

大きな国と、それより小さな国とがとなりあっていました。とうぎ、その二つの国の間にはなにごとも起こらず平和でありました。

ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊が派遣されて、国境をさだめた石碑を守っていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして、小さな国の兵士は青年でありました。

二人は石碑のたっている右と左に番をしていました。いたってさびしい山でありました。そして、まれにしか、その辺を旅する人影は見られなかったのです。はじめ、たがいに顔を知りあわない間は、二人は敵か味方かというような感じがして、ろくろくものも言いませんでしたけれど、いつしか、二人は仲良しになってしまいました。二人は、ほかに話をする相手もなく、退屈であったからであります。そして、春の日は長く、麗らかに、頭の上に照り輝いているからであります。

ちょうど、国境のところには、だれが植えたということもなく、一かぶの野バラが、茂っていました。その花には、朝早くからミツバチが飛んできて集まっていました。その快い羽音^{はねおと}が、まだ二人の眠っているうちから、夢心地に耳に聞こえました。

「どれ、もう起きようか。あんなにミツバチが来ている。」と、二人は申し合わせたように起きました。そして外へ出ると、果たして、太陽は木のこずえの上に元気よく輝いていました。

二人は岩間から出る清水^{しみず}で口をすすぎ、顔を洗いにまいますと、顔を合わせました。

「やあ、おはよう。いい天気でございますな。」

「ほんとうにいい天気です。天気がいいと、気持ちがせいせいします。」

二人は、そこでこんな立ち話をしました。たがいに頭をあげて、辺りの景色を眺めました。毎日見ている景色でも、新しい感じを見るたびに心に与えるものです。

青年は最初将棋の歩み方を知りませんでした。けれども老人について教わりはじめてから、この頃は、のどかな昼時になると、二人は毎日向かいあって将棋をさしていました。

はじめのうちは老人のほうがずっと強くて、こまを落としてさしていましたが、しまいには当たり前にさして、老人が負かされることもありました。

この青年も老人も、いたっていい人々でありました。二人とも正直で、親切でありました。二人はいっしょうけんめいで、将棋盤の上で争っても、心は打ち解けていました。

「やあ、これはおれの負けかいな。こう逃げ続けては、苦しくてかなわない。ほんとうの戦争だったら、どんなだかしれん。」

と老人は言って、大きな口をあけて笑いました。

青年はまた、勝ちみがあるのでうれしそうな顔つきをして、いっしょうけんめいに目を輝かしながら、相手の王様を追っていました。

小鳥はこずえの上で、おもしろそうに歌っていました。白いバラの花からは、よいかおりを送ってきました。

冬は、やはりその国にもあったのです。寒くなると老人は、南の方を恋しがりました。その方向には、せがれや孫が住んで

いました。

「早く暇をもらって帰りたいものだ。」

と、老人は言いました。

「あなたがお帰りになれば、知らぬ人かわりに来るでしょう。やはり親切なやさしい人ならいいが、敵か味方かというような考えを持った人だと困ります。どうか、もうしばらくいてください。そのうちに春がきます。」

と、青年は言いました。

やがて冬が去って、また春となりました。ちょうどその頃、この二つの国は、何かの利益問題から、戦争を始めました。そうしますと、これまで毎日仲睦まじく暮らしていた二人は、敵味方の間柄になったのです。それがいかにも、不思議なことに思われました。

「さあ、お前さんとわたしは、今日から敵同士になったのだ。わたしはこんなに老いぼれていても少佐だから、わたしの首を持って行けば、あなたは出世ができる。だから殺してください。」

と、老人は言いました。

これを聞くと、青年はあきれ顔をして、

「何を言われますか。どうしてわたしとあなたとが、敵同士でしょう。わたしの敵は、ほかになければなりません。戦争はずっと北の方で起っています。わたしは、そこへ行って戦います。」

と青年は言い残して、去ってしまいました。

国境には、ただひとり老人だけが残されました。青年のいなくなった日から、老人はぼうぜんとして日を送りました。野バラの花が咲いて、ミツバチは、日があがると、暮れるころまで群がっています。今、戦争はずっと遠くでしているので、たと

い耳をすましても、空を眺めても、鉄砲の音も聞こえなければ、黒いけむりのかげすら見られなかったのであります。老人は、その日から、青年の身の上を案じていました。日はこうしてたちました。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は戦争について、どうなったかと尋ねました。すると、旅人は、小さな国が負けて、その国の兵士は皆殺しになって、戦争は終わったということを告げました。

老人は、そんなら青年も死んだのではないかと思いました。そんなことを気にかけながら、石碑のいしずえに腰をかけて、^{うつむ}俯いていますと、いつか知らず、うとうとと居眠りをしました。彼方から、大勢の人の来る気配がしました。見ると、一列の軍隊でありました。そして、馬に乗ってそれを指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわめて静粛で声ひとつたてません。やがて老人の前を通るとき、青年は黙礼をして、バラの花を嗅いだのであります。

老人は何かものを言おうとすると、目が覚めました。それはまったく夢であったのです。それから一月ばかりしますと、野バラが枯れてしまいました。その年の秋、老人は南の方へ暇をもらって帰りました。

「小川未明（おがわ みめい）、国際学友会日本語学校編『日本語読本 三』による」

ことばの説明

野バラ [のバラ]

いばら科の落葉低木。枝・葉にとげがある。山野に自生。初夏、白色または淡紅色の

とうぎ〔当座〕
ものを言う〔物をいう〕

麗らかだ〔うららかだ〕

羽音〔はおと〕
夢心地〔ゆめごち〕

申し合わせる〔もうしあわせる〕

立ち話〔たちばなし〕

こま〔駒〕

勝ちみ〔勝ち味〕

王様〔おうさま〕

あきれ顔〔呆れがお〕
身の上〔みのうえ〕
皆殺し〔みなごろし〕

いしずえ〔礎〕

五弁花を開き、芳香がある。
その時。しばらくの間。
口からことばを出す。口を
きく。

空が美しくはれて、太陽が
やわらかく照っているよう
す。

鳥・虫などの羽ばたきの音。
夢を見ている時のような気
持ち。うっとりとした気持
ち。

話合いによって取り決める。
また、約束する。

立ったまま人と話をするこ
と。また、そのちょっとした
話。

将棋で、盤上に並べ動かし
て使う木片。将棋のこま。
勝てる見込み。勝てる可能
性。

ここでは王将のこと。将棋
で一番大切なこま。

あきれたときにうかぶ表情。
その人の置かれている境遇。
そこにいる人や関係のある
人を残らず殺すこと。

建物の下におく土台石。礎
石。

練習 I

1. 「いたってさびしい山でありました」にある「いたって」と同じ意味で使われているものを、次から一つ選びなさい。
 - a. 争議は8月にいたって解決した。
 - b. 参列者はいたって少なかったので、式はごく簡素におこなわれた。
 - c. 何を読むかにいたっては、別に判然とした考えがない。
2. 「ろくろくものも言いませんでしたけれど、いつしか、二人は仲良しになってしまいました」にある「ろくろく」の意味を、次から一つ選びなさい。
 - a. きちんと～しないようす
 - b. 何事もし得ないようす
 - c. たまにしか～しないようす
3. 「ほんとうにいい天気です。天気がいいと、気持ちがせいせいします」の場合の「せいせいする」の意味は何か。次から一つ選びなさい。
 - a. いきいきとしているようす
 - b. 気分がはればれするようす
 - c. 清く静かなようす
4. 「この二つの国は、何かの利益問題から、戦争を始めました」にある「から」と同じ働きのものを、次から一つ選びなさい。
 - a. 戦後の食料難からみると現代は幸福であろう。
 - b. しょうゆは大豆、麦、食塩、水などからつくる調味料である。
 - c. 人間はいつもゆだんからいろいろな事故を起こす。
5. 「馬に乗ってそれを指揮するのは、かの青年でありました」

にある「かの」は、次のどの語で置き換えられるか。

- a. この
- b. その
- c. あの

練習Ⅱ

1. 「いつしか、二人は仲良しになってしまいました」とあるが、どういうわけで仲良しになったのか。その理由を、次から一つ選びなさい。
 - a. 二人は石碑のたっている右と左で番をしていたから
 - b. その二つの国の間にはなにごとも起こらず平和だったから
 - c. ほかに話をする相手もなく、退屈だったから
2. 「二人は、そこでこんな立ち話をしました」とあるが、二人が立ち話をしたのはどこか。次から一つ選びなさい。
 - a. 石碑のたっているところ
 - b. 清水の出る岩のそば
 - c. 口をすすぎ、顔を洗っているところ
3. 「冬は、やはりその国にもあったのです」とあるが、「その国」は、どこをさしているか。次から一つ選びなさい。
 - a. 老人の国
 - b. 青年の国
 - c. 国境のところ
4. 「老人は、その日から、青年の身の上を案じていました」とある「その」は、何をさしているか。次から一つ選びなさい。
 - a. 青年がいなくなった日
 - b. 野バラの花がまた咲き始めた日

c. 戦争が始まった日

練習Ⅲ

1. 文章にしたがって、老人と青年という二人の兵隊さんの間にあったことを整理し、感じ取ったことを話し合ってみなさい。
2. 作者は、どういう気持ちでこの文章に「野バラ」という題をつけたのか。その気持ちを考えてみなさい。

練習Ⅳ

次の文を読んで後の問いに答えなさい。

出迎え

また、駅まで迎えにいかされることもあった。

[あれは、たしか夏の晩だった。父の帰ってくる時間に、ものすごい夕立がきた。私は傘を持って駅へ急いだ。早く行かないと間に合わない。うちの父は性急で、迎えが来るとわかっていても、待たずに歩き出す性分である。いつものとおり、近道になっている小さな森の中の道を小走りに歩いた。街灯もないので、鼻をつままれてもわからない真っ暗闇である。向こう側から、七、八人の人の足音がする。帰宅を急ぐサラリーマンにちがいない。もしかしたら、この中に父がいるかもしれない。しかし、すれ違っても、顔が見えないのである。] しかたがない。私はすれ違うたびに、

(ア)「歩きながら、おやじの名前を宣伝して歩くやつがあるか。」

(イ)「向田敏雄。」「向田敏雄。」父の名をつぶやいた。

(ウ)「馬鹿!」いきなりどなられた。

(エ)父は傘をひったくると、いつものように先に歩き出した。

あとで母は、「お父さん、ほめてたわよ」という。「あいつはなかなか機転のきくやつだと言って、おかしように笑っていた」ともいう。

問 1. 文中の(ア)～(エ)の各行は、順不同となっている。話を通るように並べかえ、その記号で答えなさい。

[◊ ◊ ◊]

問 2. 「あいつはなかなか機転のきくやつだと言って、……」の場合の「機転がきく」の意味にあてはまるものを、次から一つ選びなさい。

- a. とっさにその場にふさわしい行動をとること
- b. 状況に応じてすばやく行動できること
- c. たえず物事を気にして思いわずらうこと

問 3. [] でくくった文章は、読む人にその場に居合わせたような緊迫感を与える。それは、この文章のどういう書き方によるものか。次の①～⑤から適当なものを、二つ選びなさい。

- ① 接続詞で次々と文をつなげている。
- ② 過去のことを現在形で表した箇所が多い。
- ③ 事実だけを客観的に書き並べている。
- ④ 比喩や形容詞が多い。
- ⑤ 短文で構成している。

第二課 名刺と飯

ジョージ・ランバートさんはその『^{こうもう にほんだんぎ}紅毛日本談義』で「名刺」と「飯」の発音のちがいで、名刺をつくりに行行って焼めしを食わされるという騒動を引き起こした、ウソみたいな経験談を語っていますが、その話は胸にピンとくるものがあります。日本人にとって名刺は飯なのです。飯によって生命を養ってゆき、名刺によって社会生活を営んでゆくのですから、一日も欠かせないのが、名刺であり飯なのです。

韓国人である私が日本にきて、はじめて「穴があれば入りたい」気持ちになった失敗談は、その名刺にちなんだことでした。もちろんランバートさんのように、「めし」屋に入って「名刺を百枚作ってくれ!」となったのではなく、「はじめまして……」の初対面の厳かな儀式で、名刺を用意しなかったために赤恥をかいだからです。名刺屋を探してようやくそれができ上がってくるまでの一週間は、人に会うのが悪夢のごとく感じられたものです。

日本では人と人がはじめて会って顔を見合わせても、名刺を見るまではその顔は見なかったも同然なのです。名刺屋の宣伝文句に「名刺はあなたの顔」というのがありますが、まさにその通りです。そうですね、初対面同士の日本人のあいさつの光景を思い浮かべてみましょう。荒々しい米国の西部開拓者たちは見知らぬ者とぶつかれば、まずその手が腰の拳銃の引き金にいきますが、やさしい日本人の手はさっと内ポケットをまさぐるのです。そして名刺を取り出し（その時間があまり遅いと、それは初対面ではすでに減点となります）、丁寧に頭を下げ、